

居場所がなくて深夜帰宅したら、デカくて怪しい義父に『騾』と称して処女まんこを開発され、中出しで愛を叩き込まれました

サンプル（一部抜粋）

身長190cmを超える巨体。何を考えているのか分からない、光のない瞳。呼吸でわずかに揺れる厚い胸板…。

普通に生きていれば、関わる事はない怪しい男。

そんな男がある日、私の父親になった。

約4年前。

当時、私には優しくて穏やかな本当のお父さんが居た。

お母さんは仕事が忙しくて、あまり家にいなかったけど…この頃は幸せだった。

でもそんな日常はある日、突然崩れ去った。

あれは私が高校に入学して、数か月が経ったある日。

学校から家に帰ると、めずらしくお母さんが家にいて、料理を作ってくれていた。

今まではお父さんがご飯を作ってくれていたし、珍しい光景に少しの違和感があった。

「ただいま！お母さん、お仕事お休みなの？」

お父さんは？」

「今日はね、休みを取ったのよ。」

お母さんは楽しそうに鼻歌を歌いながら、小さくそう呟いた。

「……？」

上機嫌な様子がどこかいつもと違って、嫌な予感がしながら

「お父さんは？」

と改めて聞き直した。

「……離婚したから、もういないわよ。」

お母さんは鼻歌をピタッと止め、抑揚のない声で冷たく吐き出した。

「……り……くん……？」

確かにお母さんとお父さんが喋ってる所なんて、もう何年も見てないけど……

お父さんが私に何も言わずに出ていくなんて、あり得ない……。

私は心のどこかでそう思っていた。

「そう、離婚。もう小雪も高校生になったし、問題ないでしょ？」

「……問題ない……というか……」

お父さんから何も聞いてないんだけど……」

「んー、まあ、そうでしょうね。」

「……？」

「あの人、小雪の親権いらないって言ってたからね。」

新しい子供がよそで出来たんだって。」

「……へ？」

「まあ、お母さんも彼氏くらいはいるし、そこはどうでもいいんだけど。」

だから今日はね、自由な独身に戻った記念日なのよ。」

お母さんは改めて鼻歌を歌い出した。

「……」

頭がふわふわする。

だって私のお父さんは優しくて、穏やかで……誰よりも私を大切に想ってくれていて……私を捨てるような人間だとは思えなかったから。

きっとお母さんの嘘なんだ。

心の中でそう思いながら、私は鞆からスマホを取り出し、自分の部屋へ足早に向かった。

スマホを握りしめ、お父さんの名前をタップする。

「……」

プルルル…と無機質な音が鳴り響いた。

ただど次の瞬間、ブチッと電話を切られた。

「え……？」

私は慌ててもう一度お父さんの名前をタップして、電話をしようとした。

だけど…着信拒否をされたのか、もう電話は繋がらなかった。

何度も何度も…何度も…お父さんの名前をタップするのに、電話は繋がらなくて…ポロポロと

涙が頬を伝い落ちていく。

（中略）

「だから、再婚したから！

この人が小雪の新しいお父さんなの。

前の人が居なくなつて…ずっと寂しそだったし、嬉しいでしょ？」

お母さんは、本心でそう思っているのか…得意気な顔をしていた。

チラッとデカイ男性に視線を向けると、バチッと目が合ってしまった。

呼吸でわずかに上下する厚い胸板。瞳に光がなくて、何を考えているのかも分からない…怪しすぎる大男…。

取って食われてしまいそうな恐ろしい雰囲気、思わずスッと目をそらす。
絶対に関わっちゃいけないような…人に見える。

「…よろしく。」

耳の奥に直接届くような低く、深い声…。

危険を察知したように、ぞくぞくと身体が栗立ち、鼓動が早まる。

「……っ」

ちがう。何も嬉しくない。

私のお父さんは…あんなに大きくないし怪しくもない。もつと優しくて…穏やかで…。

そう思ったけど、もう私は捨てられたんだっただ…。と思い出して、心がズキズキと痛む。

(中略)

「帰るの…やだなあ。」

ぼそつとそう言いながらも手に持った鍵を、鍵穴へとガチャガチャ差し込む。

「…そんなこと、男の前で言っちゃだめだよ。」

勇吾くんの困ったような声が聞こえる。

「…はあ…」

小さくため息をついて、鍵をガチャンと回した。

その瞬間、ドアがバンツと開いた。

「……」

ドアは勇吾君の顔の直前で止まり、勇吾くんの肩がびくんつと跳ねる。

「……？」

ぼーっとしたままの私は首を傾げながら、開いたドアの隙間へと目を向ける。

激しく上下する胸板、いつも以上に光のない瞳、眉間に深く刻み込まれた皺。酔っている私でも分かる。怒ってるんだと。

お義父さんの視線は、私の目から首筋へとねっとりと滑っていく。

その視線が私の肩に置かれた勇吾くんの手にうつった瞬間、お義父さんの眉がわずかにぴくつと動いた。

「っ……！」

まずいと、本能的に思った。

「勇吾……くん……、もう大丈夫だから……」

「え、あ、うん……」

慌てて勇吾くんの手を振り払い、勇吾くんもパッと私の肩から勢いよく手を離れた。ただどその瞬間、私の身体がよろけてしまった。

「……あ、ごめ……」

勇吾くんの声が聞こえた瞬間、サッとお義父さんの手が伸びてきて、私の身体を支える。
「っ！」

遅しくて硬い……揺らぐことのないお義父さんの腕……。

妙に熱くて、服越しでも高い体温が絡みついてくるようだった。

「誰の娘に気安く触れてんだ。」

お義父さんのドスの効いた低い声が、嫌に響く。

（中略）

「ま……って、なにをする……の……」

ねっとりとした視線、私を逃がさないように覆いかぶさる巨体。

視界の全てがお義父さんで埋めつくされていく。

それが怖くて、でも逃げられなくて……もう訳が分からなかった。

「……駄だよ。」

俺がどれだけお前を大切に想ってるか。

身体の奥まで叩き込んでやる。」

(中略)

「……きつとすぐに分かる。」

おとなしく、愛されていればいいんだよ。」

お義父さんはそう言うのと、そのまま強引に下着を剥ぎ取った。

「っ！や……っ……」

抵抗の言葉は空虚に消え、ごつい手の平に強引に内ももを押し広げられる。

「……もうこんなに濡らしてるのか。」

お義父さんは短くそう言うのと、そっと私の股の間へと顔を近づける。

「ま……っ、や、汚いよ……っ！」

「……言っただろ？お前の全部がほしいって。」

これがな、本当の愛情なんだよ。」

お義父さんは言い聞かせるようにそう言うと、そのまま舌を伸ばし、敏感な場所をぐちゅっ♡と舐めあげた。

「ひぁあっ、あっ、や、だ、そこっ…っ…」

敏感な場所の先端がビリビリする…。

こんな場所汚いの…ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡とお義父さんは熱い舌で、何度も丁寧に舐める…。

「は…あっ、あ、あっ…っ、お義父…さん…だめ…っ…」

そう言いながらも、今の私は足を広げ、ヌルヌルとした感覚に身体を震わせている。

その矛盾が…気持ち悪いのに、頭を破壊していく。

「…一旦クリでイカせるか。」

お義父さんは短くそう言うと、くぱっと片手でクリをむき出しにし始めた。

「っ！」

びくっとした瞬間

じゅるじゅるじゅるっっ♡♡

と激しくクリを吸われ、そのまま舌でごりっ♡ごりっ♡と上下に刺激された。

「んぐ、あぁあぁあっ、や、あ、あ、あぁあぁあっっ」

声にならない声が、部屋に響きわたる。

「や、あ、ひ…あ、んう、あああつつつ!!」
どうしよう、お義父さんがぬちゅ♡ぬちゅ♡と舌を動かす度に、クリの先っぽがひりひりして、気持ちいいのに怖い…。

「ま…って…え、ああ、や、舌、うごかさない…で…え、あああつつ」
ふう、ふう…と必死で息を吐いて、首を横に振る。

ただどお義父さんはそんな私を見て、わずかに目尻を下げ

「あ…全部可愛い。」
と低く小さく…本音が漏れたように呟いた。

その一瞬の声の低い振動と、甘い響きと…愛のように感じる何かが混ざり合ってパチンと頭の中で何かが弾けた。

「んう、きちやう、お義父…さん、まって、や、あああつつつ!!」

「いいよ、全部俺のせいにしていい。だから…ただ狂うだけでいいんだよ。」
義父の溺愛中出しの全容は製品版にて)